

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のことばを掲載いたします。

いつも悩み苦しんでいる病気のことを持病という。全治することができず、ときどき起る病気のこともある。

ぜんそく、神経痛、リウマチ、胃病、腎臓病、副鼻腔炎（蓄膿症）、痔疾……その他、数えあげればきりがない。本人にとっては、まったくイヤなしろものである。

しばしば悩まされるというのは、もちろんその原因が除去されていないからだ。医学的には原因不明の場合もあるだろうし、宗教的その他からみて、いちおう原因と思われるものがあったても、本人がそれをどうしようもないという場合もある。とにかく治らないので、不愉快きわまりなく、まったく手を焼くのである。

持病は本人にとってはまったく困ったものなのだが、しかし治そう、治そうと焦ったり、頑張ったり、囚われすぎていたり、かえって治りにくい場合がある。それどころか、ますますひどくなったりするもの。持病はないに越したことはない。しかしどうしても治らないときは、その見方を変えることだ。つまり「自分にこの持病があるからこそ、かえって自分を守ってくれている」と、むしろ持病に感謝する。そうした気持ちに切り換えるのである。

これは単に気持ちだけの問題ではない。



持病に感謝しよう

丸山竹秋

事実がそうなのだ。持病は守り神なのだ。

病気というのは、自分や社会の不自然な状況（ゆがみ、ひずみ）がもたらすものである。ときには他人の病気を引き受け、身代りになる場合もある。しかし一般に持病とは、そうした不自然なゆがみやひずみを完全に矯正することができない状態で、苦痛が生じたら、それがゆがみやひずみを示していることであり、また一面をみれば、自分をセーブして、危ない橋を渡らせないでいると考えられる。苦痛が一種の赤信号となつて「また危ないぞ、気をつけろ」とブザーを鳴らしているから、苦痛という形になつて現われる。だから無茶をしたり、乱暴をしたり、無軌道ぶりを発揮したりすることができなくなるのである。

またしても、ぜんそくの発作！

だからよいのである。無茶酒が飲めない。人を責めに出かけられない。家の者をこれ以上怒鳴れない。もちろん、他の人がぜんそくの人を見てこのように冷やかすのは間違いだ。

同じような持病でも、人により、様々なケースがあるので一概にはいえませんが、総じて持病を毛嫌いしているだけでは何の役にも立たないのみならず、かえってますます病状を悪化させることにもなりかねない。それよりも、人に対しても自分に対しても、利己的ならずさからでなく、自他ともに建設的な意味で、わが持病を役に立てることだ。プラスにし向けていくことだ。

『繁栄の法則』より